寿で暮らす人々　６４

寿地区自治会結成の頃とその人々　その２

　結成のための準備会合は頻繁に持たれ、熱気がありました。会合を重ねるにつれて少しずつメンバーが増えていきました。以下はその主な方々です。僕の記憶から抜け落ちてしまった方もいらっしゃいます…。

　秋場（食堂店主）さん　中田（謄写印刷所経営・麻薬相談員・ボランティア）さん　木下（簡易宿泊所旅館組合事務局長）さん　朝日（管理人）さん　八木沢（管理人）さん

御園（管理人）さん　長井（労働者）さん　志村（労働者）さん　渡部（労働者）さん　小野（労働者）さん　板倉（労働者）さん　山（労働者）さん　田代（労働者）さん　紺野（労働者）さん　金原（喫茶店主）さん　田代（屋台店主）さん　三井（管理人）さん

谷川（横浜市寿生活館）さん　村田（寿福祉センター）等など。

いま思えば、管理人さんの方々もそうそうたるメンバーでした。その方々は、寿ドヤ街の形成が本格化した昭和35年頃から、秋場さんや木下さんたちと活動を通して知り合い親しくなった方々でした。当時、行政の施策は遠く、寿地区が所属している埋地七か町町内会の活動は、寿の必要即応の活動ではもとよりありませんでした。そんな中で、秋場さんや木下さんたちは、寿の管理人有志を募って寿で暮らす方々の生活問題解決のため様々な地域活動を展開（僕の推測）していました。

さて、日雇労働者の方々は、横浜市立寿生活館の相談員たちとともに、寿に足りないが必要なことを実現するために様々な活動をしている方々でした。秋場さんは柔和で温厚な人柄でした。後年、人づてにですが、秋場さんは、特攻隊に籍を置き訓練の日々の中、飛び立つ前に終戦を迎えた経歴を持つ方であると知りました。

晩年のある日、願って当時の写真を見せていただきました。昔見た映画そのままで、白いマフラーと戦闘帽が印象的でした。

管理人の朝日さん、八木沢さん、御園さんはそれぞれ強面、柔和、優しさなど個性あふれる方々でした。共通するのは宿泊者の面倒をとてもよく見ていたことです。僕も相談で泊る所がなくて困っている方のことではよく頼りにさせていただきました。当時の管理人さんの役割は大きくて、多くの管理人さんは宿泊者の生活の世話や相談相手となっていました。もっとも宿泊料を徴収するだけという方もいらっしゃいましたが。いろいろな個性の宿泊者の相談や争いごとなどてきぱきとさばいていました。三和荘の柱井さんと言う管理人さんは、こんな方でした。宿泊しているAさんは高齢でアル中、妻は知的障害でした。小学生の子どもと生まれて間もない赤ん坊の四人家族を陰に陽に面倒を見ていました。勿論、他の家族の世話もしていました。Aさんは、部屋でもよく失禁し、小さなちゃぶ台の下にバケツを置いて、それを便器代わりにオシッコをするのでこぼれたりあふれることもありました。そんなわけですから、床が抜けたのも一度や二度ではなかったといヽます。それでも追い出さずに宿泊させていました。柱井さんの相談を受けた保健所の寿ドヤ街の担当の渡辺保健師（当時は保健婦）さんは、早速Aさん宅を訪問、赤ちゃんのお尻は、真っ赤にただれていました。お母さんは、おむつのウンチは洗わないでそのまま窓にかけて干し、掻き落としてそのままおむつしていたのですからただれてしまうのは無理もありません。渡辺さんからお湯を持ってくるように言われ、大きなやかんにお湯を入れて何度もせっせと運びました。渡辺さんは、廊下で赤ちゃんのお尻をすすぎ、洗いました。そんなでしたが、Aさんもお母さんもそれなりに子育てしていました。周りのおかみさんたちも日々できる手助けをしていました。

商店主や管理人さんたちと日雇いで暮らす人たちとの考え方は、違いました。一方は、計画的な生活をし、寿のいろいろな階層の方たち、行政等と理解しあいながら活動を進めていこうという考え方。他方、日雇いの労働者は、その日の仕事が生活の糧、その日の生活が第一にと考えていました。また、行政や会社や市民から有形無形の差別を受けて生活しています。日雇の生活や労働の問題の目に見える解決が求められました。また一人ひとりの考え方や性格も違います。真剣な議論を交わす日々が続きました。

また、継続的な会議に出席し続けることは、日雇労働者には難しいことです。欠席している間に話されたこと、決まったことについて時には承服できないこともあります。真剣だからこそ争いも生じました。谷川さんや僕は、参加者の間を頻繁に訪ねて報告し、説明し会議に出席した人としない人の溝を何とか埋めようと努めました。また争いについても双方の言い分を丁寧に伝えて理解しあえるように努めました。

自治会の発会に向けての活動が広がるにつれて、参加するメンバーは、お互いを少しずつ理解するようになってきました。

大きな問題が起きてきました。簡易宿泊所の経営者一部は、埋地七か町町内会の役員でした。寿の自治会結成に向けて活動している管理人や商店主に対して、圧力がかかりました。また、日雇労働者には、親方や手配師から仕事を回さないなどと圧力がかかりました。

生活の根幹に係る圧力で少しずつ参加者が減っていきました。自治会の結成を呼び掛けた当初から、また具体的な活動を始めた頃からそういうこともあると考えていたのですが。

商店主、管理人、労働者たちは、表舞台から退く人、引いて応援する人と分かれました。

ここに二つの選択肢がありました。自治会の結成は時期尚早だから結成を見送ろうという意見と、結成を見送れば町の人たちの信頼を失い、これからの活動に大きな悪影響を残すことになるので結成しようという意見です。どちらを選ぶにしても大変なことである予感がしました。皆から山ちゃんと呼ばれたていた若い日雇労働者は、いつも厳しい意見を言う人で、それがきっかけでよく議論が沸騰しました。僕は、寿地区の問題を解決するための「自治会」には常に批判的だった山ちゃんが、途中で辞めるのは反対だと発言したのには驚きました。議論の末、発足に向け更に活動を続けることになりました。

昭和４３年も１２月を迎え寒さも厳しくなってきていました。

次回は　寿地区自治会結成の頃とその人々　その３